卒業生だより

名前は似ていても 性格の異なる大学で

平成11年卒
阪本　崇

月日が経つのは早いもので、大学を卒業してから30年、大学院を出てからでも25年が経とうとしています。この間、私は一度も京都を離れることなく、京都大学からもそれほど離れていない山科区の京都橘大学（着任時は京都橘女子大学）で、大学教員としての人生を送ってきました。

学部時代からの恩師である池上惇先生が学部長を務められた文化政策学部の開設メンバーとなったのですが、はじめは戸惑うことばかりでした。単に私が先生方の仕事について無知であっただけかもしれませんが、修学指導、就職支援、保護者との連携なども含めて、学生ひとりひとりのサポートを手厚く行う京都橘大学での仕事は、「学者」・「研究者」をイメージしていた大学教員の仕事とは随分と異なるものだったからです。ただ、小学校教師だった父・祖父をもつ私にとって、学生の学びをさまざまな角度からサポートするという仕事それ自体は、とくに違和感のあるものではありませんでした。

２０１６年度に現在の経済学部・経営学部・工学部の前身となった現代ビジネス学部の学部長を、２０１９年度に副学長を拝命してからは、主な仕事は、当然ながら大学の運営にシフトしています。最初の大きな仕事は、経済学部・経営学部・工学部の3学部同時開設で、カリキュラムの検討や着任して頂く先生方のリクルートなどで多忙な日々を送りました。２０２１年度からは、学園の将来計画である第3期マスタープランの策定にも関与し、現在はその実現に向けて、「学びで世界を変える」というスローガンのもとに教養教育改革などにも携わっています。

このように、私の現在の仕事は、学生時代や大学院生時代に思い描いていた研究者としての仕事とはかなり違うものですが、その経験のひとつひとつが芸術文化の公的支援や、高等教育の財源調達といった私自身の研究にも行かされつつあるように思います。距離だけでなく名前もかなり近いにもかかわらず、京都大学とは教育研究機関としての性格が大きく異なる大学での活動にはなりますが、これからも、私なりに教育研究に力を注いでいければと考えています。

人生も研究も冒険したい

平成17年卒
中村　良太

平成17年に経済学部を卒業しました。卒業後はイギリスに渡って博士号を取り、現地の複数の大学に勤務して帰国し、現在は一橋大学で教育研究に従事しています。専門分野は医療経済学、医療政策です。

ここ数年は、主にアジアとアフリカの低中所得国の医療保障の研究を行っています。日本以外では、セネガル、ブータン、タイが主な研究対象国です。地理的にも経済の発展段階も大きく異なる国々ですが、どの国も目標は同じ。国民全員が過度な費用負担無しで適切な保健医療を享受し、健康を維持できる仕組みを作ることです。研究を通じて、そのお手伝いをしています。

アフリカ大陸最西端にあるセネガルでは国民の大半が無保険です。家族の誰かが病気やケガをすると、経済活動の手段である田畑や家畜を売ったり借金をしたりして医療費を捻出します。そのため、治療によって健康を取り戻せても、医療費の支払いによって家計が破綻してしまいます。その結果、例えば子供に教育を受けさせることができなくなり貧困から抜け出せません。セネガル政府やＪＩＣＡと協力して、公的保険が普及しない原因を取り除くべく、僻地をまわって現地で暮らす人々の話を聞いた上で、調査やフィールド実験を行っています。毎年一ヶ月弱はセネガルに滞在する生活を送っています。

低中所得国の医療保障に取り組むことは、研究者としての差別化や競争力の維持に役立っていますが、それだけでなく、研究活動を楽しくする効果もありました。若手の頃は、他人が集めたデータをもらってきて、それを分析して論文を書くという、ほぼ全ての作業が自室で完結する研究を行っていました。いまは色んな国に出かけていって、難しい交渉事やトラブルも多いのですが、冒険をしながら研究を行うことに人生の価値を見出しています。セネガルでは、気温50度を超える砂漠地帯をエアコン無しの車で連日走り続け、ブータンでは、辺境の家庭で作られる伝統酒を飲んで集落を周り、同国でもっとも深刻な健康問題であるアルコール中毒の実態解明に体を張って迫っています。

育児も一つのキャリア

平成22年卒
大成　安代

卒業後はＮＨＫに入局し、アナウンサーとして20代を駆け抜けました。地域報道を経て、スポーツやオリンピック報道などに携わりました。結婚を機に外資コンサルへ、そのあとは広告代理店に転職、並行して司会などのアナウンサー業も続けています。一貫性がないキャリアですが、自身の「今この仕事がやりたい」を叶えてくれたのは京大での学びです。ゼミでの文献輪読やテーマ別議論は、問題発生時の対応力や完遂力に繋がっています。加えて経験を重ねる中で獲得した幾つもの視点が私のキャリアを支えています。

コロナ禍に2度の妊娠出産を経験し、長男は3才、長女は1才になりました。育児に専念する時間は、自身の内面を耕すことができるクリエイティブな時間だと感じます。というのも、病院は付き添い面会禁止、児童館も使えないなどコロナ前の常識が通用せず、新しい最適解を探る日々だったからです。夫も育児休業を取得し、私たちのスタイルで楽しみながら育児をしたいと辿り着いたのが「旅する育児」です。乳児連れの旅は大変という常識を覆し、人混みを避け沖縄や中四国など各地を旅しました。必要な物を事前手配し綿密に情報収集し計画すれば、親も子も楽しめると分かりました。

育休中の今しかできないから、と去年12月から2か月間、家族でオーストラリア４都市を巡る旅に出ました。地元のスーパーや市場で買い出して料理し、無理せず過ごす。観光スポットを訪れる日もあれば、海辺や公園で遊ぶ日もある。暮らすように旅をすることで、子どもの負担をできるだけ少なくしつつ、私や夫は刺激的でワクワクする時間を過ごせました。現地の人々のおおらかさ、子育てのしやすさも感じました。長男が「This one please」と食べたいアイスを自分で注文できるようになり、急成長ぶりにも驚きました。

冬には復帰予定です。泣き続ける子どもに対応する、目を離さず見守る。育児で得た優しい物の見方や考え方で、常識にとらわれず楽しむ気持ちで、今度は社会に貢献出来たらと思っています。

母校にて培った経験を糧に

平成29年卒
竹中　佑旗

２０１７年に大学を卒業したのち、外資系証券会社の株式調査部に所属。その後は国内の独立系エンゲージメントファンドを経て、現在は外資系資産運用会社の日本拠点にて主に日本株の調査・分析に携わっています。現職ではアジア各地に同僚がおり、多様なバックグラウンドの仲間と日々共に議論し、とても有意義でエキサイティングな時間を過ごしています。

大学４年間の学びは今の私の糧となっています。２回生より草野真樹先生のゼミに所属し、経営戦略やコーポレートファイナンスについて学びました。そのほかにも企業分析・株式投資を学ぶサークルに所属し、面白い企業はないかと四季報をめくる日々でした。３回生の秋からはキングス・カレッジ・ロンドンに１年間交換留学に行き、英語で物怖じせずに議論する術と度胸を身につけました。このように大学で学んだ知識や経験はいずれも日々の業務の中でダイレクトに役立っています。そして何よりも大学時代に学んだのは、仮説を立て物事を批判的に思考するプロセスです。特に株式調査において企業価値を正しく評価するためには、事業や製品の理解はもちろん、ガバナンス、経営者、競合、取引先とありとあらゆる側面から複眼的に企業を理解し、そこから合理的に導かれる企業の将来の姿と将来のキャッシュフローに注目します。まさに知の総合格闘技であり、大学時代に学んだ思考プロセスの応用の連続です。

大学時代に所属したテニスサークルの仲間とは、今でも一緒にテニスをしたり、家族ぐるみで遊んだりすることもあります。社会人生活が始まり、家庭を持ち、子供が生まれると、なかなか自分自身の時間を作ることが難しくなりますが、大学時代の友人に久しぶりに会うとすぐに学生時代の関係に戻ることができ、唯一無二の時間を過ごすことができます。

在学中に参加したジョン万プログラムではオックスフォード大学で一夏を過ごし、妻に出会いました。今の私と、私の家族を築くきっかけとなった母校に深く感謝しています。